慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	思想史研究の諸問題
Sub Title	Problems of the historical study of thought
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.5 (1952. 5) ,p.297(1)- 314(18)
JaLC DOI	10.14991/001.19520501-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小泉信三著　忽ち增刷！

初學經濟原論

久しく絶版の書修正の上再新刊！

「經濟學は難解でない。これは半日で讀める經濟原論」と著者小泉博士はいふ。いかなる書を讀む人にも本書は手引きとなるであらう。

定價一八〇圓　送料二四圓

金原賢之助
藤林敬三　監修　山本登　吉田啓一　共編　（五月下旬刊）

入門　經濟學辭典

慶大經濟學部教授・助教授他四十氏の執筆になる學生待望の平易明快な經濟學辭典！

本辭典は近時巷間に發賣されてゐる經濟語辭典とは異り、體系的に編輯された經濟學辭典である。また既刊の專門的經濟學辭典の如く徒に難解のものではなく、用語、表現に特別の意を用ひ、多大の犧牲を拂つて完成した絶對比類なき經濟學辭典である。（内容見本送呈）

（B6判四七〇頁總クロース上表）　豫價四五〇圓送料三〇圓

吉田啓一著　基本經濟學講義　定價二八〇圓　〒二四圓
金原賢之助著　外國爲替の理論及び問題　共著　定價三八〇圓　〒三〇圓
山本登著　改訂世界經濟論　定價四五〇圓　〒三〇圓
白石孝著　國際貿易の基礎理論　定價一二五〇圓　〒三〇圓
白石孝著　增訂貿易政策要論　定價三〇〇圓　〒三〇圓
町田義一郎著　銀行論　定價四五〇圓　〒三〇圓
小高泰雄著　增訂經營經濟學總論　定價四八〇圓　〒三〇圓
國弘員人著　四訂企業形態論　定價三八〇圓　〒三〇圓
森五郎著　經營勞務管理論　定價三五〇圓　〒三〇圓
小高泰雄　和田木松太郎　共著　會社稅務會計論　定價四五〇圓　〒三〇圓
小高泰雄著　會計學概論　定價二五〇圓　〒三〇圓
鈴木保良著　商業經營　定價四三〇圓　〒三〇圓
小高泰雄著　新訂企業經理入門　定價二五〇圓　〒三〇圓
鈴木諒一著　四訂經濟統計論　豫價四〇〇圓　〒三〇圓
鈴木諒一著　國民所得の理論と實際　定價二二〇圓　〒三〇圓
山本万二郎著　哲學講話　定價三〇〇圓　〒三〇圓

東京都千代田區神田小川町3の12　泉文堂　振替東京13804番　電話神田(25)4466番

思想史研究の諸問題

野村兼太郎

一

思想史の對象となるものは單なる個個の學說ではなく、それよりももつと廣い意味をもつてゐる。ある一つの學說も人間の思惟の所產であり、その意味においてはやはり思想の一つのあらはれである。學說はむしろある思想の科學的表現であるといつてもよい。例へば經濟學說の發生以前にも經濟思想はあり得る。恐らく原始人の間にも經濟思想はあつたらう。從つて思想史の對象となるものは學史、あるひは學說史の場合よりもはるかに廣汎なものとならざるを得ない。

ものを考へることが人間の特徵の一つであり、個個の思惟に何らかの系統が與へられて一つの思想になると考へられる。と同時に一つの思惟を形成する時に、すでにその根柢に何らかの思想がなければならないともいへる。あるものを思惟する時、それを明確に決定する根本理念を必要とするからである。このことは思想といふ概念がある根本的なものを包含してゐることを意味する。即ち一つの思想は多くの思惟に依つて發達完成されるが、最初の思惟はその以前に何らかの思想の形成されることから生ずる。この意味において思想は絶えず變化するものであるが、常にわれわれの思惟の基本をなすものである。

思想はいふまでもなく各個人において個個に形成される。しかし一般にある一つの集團又はある一定の時期について同一思想の存在が認められる。例へば國民思想とか古代思想とかいふ場合の如きである。この種の思想は勿論その集團なり、時代なりを形成する各個人の思想を離れて存在するわけではない。ただ同じ集團なり、同じ時代なりを構成する各個人の思想を通じて一つの共通性の存在してゐることからいひ得ることに過ぎない。それは必ずしも各個人の思想が同一であるといふことではない。後に述べるやうに、同じ集團内に、又は同じ時代において、全く相異なつた二つ以上の思想が互に對立することは決して珍らしいことではない。かつそれらのうちの同一傾向のものを取つてみても、それぞれ多くの異なつた點が發見される。各個人の思想は各自相異なり、同一のものは一つもないといつてもよい。然るに全體としてある集團なり、ある時期をとつて考へる時、ある共通の思想的傾向を認めることが出來る。思想史の本來の對象となるものは、各人の個個の思想ではなく、かかる全體的思想であるべきであらう。

例へば日本經濟思想史といふやうな場合、日本における經濟思想が古代から近世に至るまでにどう發展して來たかを跡づけるべきであり、單に個個の經濟論者の學說を年代的に並べることではない。しかしこのことは實際に可能であらうか。全體的思想の表現は具體的に明確にすることは、普通考へるほど容易なことではない。普通日本國民思想といふやうな言葉で表現されてゐる概念は極めて漠然たるものに過ぎない。經濟思想の場合にはそれよりは具體的ではあるが、經濟現象が人人の理念に明確に認識されてゐない時代にあつては、矢張り漠然たらざるを得ない。換言すれば人間の思想はその生活構造の如何に依つて形成されるからである。故に思想史の對象はある全體の一般的思想ではあるが、これを明かにするためには、それに屬する個の思想を一つ一つ吟味してゆくより外に途がない。

個の思想はその個を成立せしめた幾多の條件に依つて規定される。その點においてそれは極めて複雜な過程をもつと共に、個性の強いものとなる。カントの思想はカントの一切の生活を背景として生じたものであり、マルクスの思想はマルクスの享けた全生涯の結果として生じたものである。それらの生活の極めて些細なことと雖も、もしそれが異なつてゐれば、全く違つた思想を生んだかも知れないのである。ある書物を讀んだか讀まなかつたかに依つても、又ある肉體的疾患があつたかなかつたかに依つても、その思想は著しく異なることがあり得る。殊にその個が獨創的であればあるほど、それらの條件に依つて強い影響を受ける。ただ所謂亞流（Epigonen）はその先驅的思想に依つて壓倒的に支配されるために、自己の體驗を強く生かすことが出來ない。時に末梢的な批判はするが、自分自身のものを生み出す力をもたない。しかし個の思想は本來においては獨自のものでなければならない。

かく個の思想はそれぞれ特異性をもつが、それにも拘らず思想が後に述ぶるやうに現實の生活に制約されるが故に、その生活に忠實であればあるほど、共通性を有することが多い。時に全く無關係に同じ思想が同じ時代又は同じやうな社會構成の下において發生することがあるのはそのためである。ただ個自體の受くるところの影響――それについて委しくは後に述べる――如何に依つて各個については著しい差違を示すことになる。概していへば思想家と呼ばるるやうな人人は最もよくその時代なり、その集團なりの特徴を反映するものである。しかしこのことは必ずしもそれらの思想家がその全體を完全に反映することを意味してゐないし、從つて又各思想家が同一思想をもつといふことも意味してゐない。

しばしば先覺者といふ言葉が優れた思想家に與へられる。しかし先覺者と雖もある時代、ある社會の全體的思想から逸脫し得るものではない。ただその時代なり、その社會なりの現實の狀態に對する把握が一般人よりも優れてゐたといふに止まる。故にこれらの思想家の個の思想を檢討することは、それを通じて當時の時代思想なり、社會思想を

知ることとなる。ただこの場合、それらの個の思想が全體に對して如何なる關係に立つかを明確にする必要がある。一見その時代思想から全く離れた突飛な意見と思はれるやうな思想でも、さうした思想を生ぜしめたのはその時代なり、その社會である。それが存在したことにはそれだけの存在理由がある。その存在理由の價値はそれが當時の流行思想であつたかどうかに依存するものではない。その當時にあつては全く埋れた思想であり、認められなかつたものであつても高い價値をもつものもあり得る。所謂先覺的思想の如きはむしろ同時代者に認められない場合の方が多い。それにも拘らずそれらの價値が高く評價さるべきであるといふのは、現實を把握することが鋭敏であり、人類の發展に對する理解が深奥なるが故である。從つて思想と現實との關係を知らなければならず、そのためには當時の現實が明確にされなければならない。それに依つてのみ個の思想がその全體との價値關係を規定することが出來るのである。故に思想史の研究にはその時代の史的研究が前提條件として絶對に必要である。しかもそれは單に一般的概論史のみに止まつてはならない。なほこのことは後に個の思想について述ぶるところで再論する。

二

思想史の研究は個の思想の檢討を通じて全體の思想の發展を明かにすることにあることは前述の如くであり、從つて個の思想の問題について述ぶべきであるが、その前に少しく全般的に思想の發展について述べて置きたい。思想の發生といふやうな問題は頗る難問であり、容易に解決し得ない問題であらう。要するに現實の生活に對する人類の意志的判斷を構成するものとして生じたものである。その發生の當初においてはあるひは極めて單純なものであつたかも知れない。しかし思想史研究となるやうな對象の段階に達すれば、その初期においても極めて複雜なものとならざるを得ない。

現實に對する人類の理解が一つの思想にまで纏め上げられて行く間に、常にある意志的要求が伴ふ。解り易くいへば「かくありたし」といふ主觀的意欲が現實を部分的に理解することになる。從つて現實に對する理解が全集團又は全時代においてただ一つの理想に歸一されるといふことはむしろ極めて稀である。一つの社會においてある特定の思想が優越（ドミナント）であるといふことは、たまたまその思想が現實生活における勢力の意欲（ヴォリション）と密接に結合してゐるからである。現實の變化がその勢力の均衡を失ふと、潜在してゐた他の思想は急激に展開を始める。その場合一般には不安定な思想狀態にあるといはれる。それはやがて現實に即應して一つの安定思想に到達することもあるが、嚴密にいへば一つの思想に統一されるといふことはあり得ない。

相反する二つの思想傾向の何れかにすべてのものを統一することは不可能である。現實の表現が二個の對立觀念に依つて示され、それに對する各人の評價は各人の性格に依つて決定されるから、それに依つて規定さるる思想も後に述べるやうに極めて千差萬別ならざるを得ない。例へばある時代に主觀的思想が優越した場合でも、その對蹠的な客觀的思想が絶無であつたのではなく、又その中間的思想も存在し得ないのではない。事實は幾多の色差を有する思想が存在してゐるが、全體として主觀的思想が當時の社會的通念のうちに强力であるといふに過ぎない。思想のかうした狀態は「道は中庸にあり」といふが如き思想の成立も可能にする。一つの思想が極端に走る時には必ず現實を包含し得ずして、現實から遊離する。現實から遊離しても思想は獨自の存在を續けることも出來るし、又時に思想が現實を指向することもある。しかし現實から離れた思想は結局强力であり得ない。恒常的中正の存在として中庸は主張される。だが、それは多くの人の意欲を必ずしも滿足させるものとは限らない。從つて反對思想の展開をみるのが、普

通の思想的發展の傾向であり、一應辯證論的發展があらはれる。しかしその結果は必ずしも新しい合一思想への發展を示すものとは限らない。

思想發展の一つの特徴は古い思想が常に繰り返されることである。例へば個人主義思想が勢力を失つて、全體主義思想が起るが、それが極端に達し、現實性を失ふと、再び個人主義思想が主張される。思想において新しきものなしといはれる所以である。その意味においては思想は常に繰り返される。プラトンやアリストテレスがその價値を失ふことはない。それならば思想の發展は單なる繰り返しに過ぎないのであらうか。概括的にいへばそれは繰り返しである。ただその繰り返さるる時代、例へば古代思想とルネッサンスのやうに、その背景となつた現實の社會は著しく異なる。又わが國の古代における儒教思想と江戸時代の儒教思想の如く、その背後の現實社會の差違は同じく儒教思想であつても全く效果を異にする。即ち思想の意義はその思想を形成した現實と關聯して考察されなければならず、その發展も現實の發展と共に考慮さるべきであらう。

ただ前述したやうに、思想はそれ自體において展開する可能性がある。從つて現實の如何を問はず、時には現實よりも非常に後れたと思はれる思想が殘存し、又時には現實よりはるかに進んだと考へられる思想の發生をみることがある。勿論それらはそれらが存在するだけの現實的理由はある。現實のうちに潜在する素因がそれらの思想を構成させるからである。從つて思想は一見現實から離れて自由に構成さるるが如くみられ、又その限度において思想は獨自の展開を示す。しかしそれは現實と甚だしく遊離するに至れば、前述の如くその時代における有力な思想とはなり得ない。もしその現實における潜在せる素因がその後現實において表面化するに至れば、それらの思想も急激に採り上げられ、新しい意義が附せられる。そしてその種の思想家に對して先覺者の名稱が與へられる。その本來の思想の意義は必ずしも同一でない場合もあり得る。元來われわれの思想は言葉に依つて傳達される。然るに言葉そのものが時代に依つてその内容を異にし、否時に個人に依つても異なる場合が少なくない。從つて何ら先覺的意識をもたぬ者を先覺者と稱することがある。ただその場合でもその時代の潜在的素因を把握したといふ意味において當人の意識すると否とを問はず先覺者と稱し得ることもあるが、時には全く反對の場合にも言葉の内容の變化から誤認することもあり得る。思想史研究に際して言語學的研究の重要な所以である。

三

以上はある一つの思想圏内における思想と現實との關係について述べたのであるが、さらに思想は全く異なつた思想を外部から導入して一層複雜な發展を遂げる。勿論このことは個人の思想についても同樣なことがいへるのであるが、今の場合民族を中心として述べる方が便利であらう。

ある民族の固有思想は多くの場合異なつた思想の刺戟に依つて發展する。前述の如く思想は主觀的意欲が現實を部分的に把握し、意志の要求として表現される。從つてその思想は現實の全體的把握の上に置かれないから、違つた段階、又は異なつた意欲に基づく思想の導入に依つて全く新しい現實の把握が可能になる。從つて固有思想は外來思想の刺戟に依つて極めて顯著な影響を享ける。その場合進んだ文化の段階にある民族の思想と雖もある程度の影響を後進民族の思想から享けることがある。しかし概していへば後進民族の享ける影響の方が大である。

後進民族の文化の段階が著しく後れてゐる場合、假令その民族が表面的に優秀文化を攝取したとしても、思想的受容は殆ど不可能であるか、又は極めて困難である。時にはその民族自體の滅亡を來たすこともある。外來思想の受容

は一般に考へられてゐるほど容易な問題ではない。第一にその思想を受容し得るだけの理解力を後進民族がもつてゐることが必要である。換言すれば固有思想自體のうちに思想的準備がなければならない。このことは前に述べた違つた思想――即ち外來思想の異質性といふことと矛盾するやうに思はれるかも知れないが、それは現實に對する把握の方法の差違であつて、現實そのものの本質的相違ではない。例へば近世資本主義的思想がそれより後れた段階にある民族に導入された場合、もしその現實が全く異質的であればその思想は何ら影響をも與へ得ない。又現實は後れてはゐるが、同じく資本主義化する傾向、例へば貨幣經濟の著しい進展を示してゐるといふやうな場合には、その思想を受容する可能性はある。しかしもしその現實に對する思想的把握が極めて弱い場合には、外來思想を却つて強く拒否する。故に外來思想自體のうちに思想的準備が必要なのである。この場合多く思想的模倣が流行する。

外來思想を優秀なりと考へる結果、一般に全面的にこれを受容せんとする意欲を生じ、ここに模倣が行なはれるが、それはその民族の現實とは著しく違つたものになる。そのために外來思想の影響に依つて後進民族の間には思想的分裂があらはれる。それは他面思想と生活との分離となり、思想としての力を失ひ、思辨的遊戯化する。元來外來思想は異質性をもつものであるから、そのままの形においては文化の段階が同一の場合にあつても全面的に受容し得ることはない。外來思想の優秀といふ前提の下にのみ全面的受容が行はれるに過ぎない。從つてこれに對する固有思想の反抗と現實生活の矛盾とが當然發生せざるを得ない。かうした場合外來思想の攝取は極めて困難であり、又表面的に流れる傾向はあるが、もし現實の發展傾向が同一であり、ある程度の思想的準備が出來てゐれば、現實に對する思想の指導的影響は頗る有效である。

現實が外來思想に依つて指導され、急激にその思想に適應して行なつても、現實の個別性のために常に同一の結果を生ずることはない。從つて外來思想はその民族の固有思想に依つて補正され、變更されざるを得ない。然らざる限りその外來思想は有力化しない。例へば日本に渡來した佛教が有力になるためには、それが日本的佛教に變化しなければならなかつたが如きである。かかる思想の同化は、もし外來思想と固有思想の本質的差違の甚だしい場合には短時間の間に實現することは困難であり、外來思想に依つて指導された現實がある程度まで新しい生活を確立し得た後の世代において實現し得るに止まる。

以上を要約すると、固有思想Aは外來思想Bの影響を受ける。最初全面的模倣に依つて表面上Bの如くなることもあり、又AとBとが分離し併行して存在することもある。時には兩者が猛烈に相排除する場合も起る。この場合注意すべきはAのうちに存する古い思想がBの外形を借りて復活する場合もある。しかし結局それらはA＋Bの形で統合されてゆく。この段階では思想的矛盾は依然として存在し、完全に融合され得ない。A＋Bはさらに進んで現實に照應して新しいA′に同化する。この場合それは最早外來思想ではなく、その民族自身の思想である。思想の發展はそれ自體においてもこれと類似の發展形態をとることは前に述べた如くであるが、それが一集團、例へば一民族内だけに止まつてゐる時は、外來思想の影響の如くに刺戟が強くなく、動もすれば、優越せる思想傾向に固定しがちになり、發展性に乏しい。從つて繰り返し的傾向が著しくなる。この意味では外來思想との接觸は思想發展に最も大なる效果を生ずる。

外來思想の影響についての上述の説明は最も簡單な場合である。實際においては相次いで繼續的に惹起する。從つてもしAがBに比して著しく劣つてゐる場合、Bの繼續が強烈であつて容易にA′は發展し得ない現象を生ずる。明治以降における日本の思想界の狀態の如きはこれに類する。その場合思想は現實から遊離し、正確な判斷の基礎を缺き

現實的勢力をもち得ない。そのために實際においては最早現實的基礎をもたない古い思想が依然として殘存し、時には却つてその方が一般に生活と合致するかの如き感を與へる。

思想史研究の上に困難な問題は外來思想の影響の限度を明かにすることである。江戸時代の儒者のいふ忠孝思想の如きは最早外來思想ではなくて、日本思想である。表現されてゐる言葉のみを以つて影響の度を決定することは出來ない。文化の後れた國においても進んだ國の思想が言葉を通じて移植されるが、思想そのものがどの程度の影響を與へたかを明かにすることは甚だ困難である。又殆ど同樣の文化の段階にある二國間の思想交流についても多くの困難がある。前者の場合においては使用さるる文字は同樣でも、その內容において著しく異なることがあり、殊に模倣の段階にある場合には、恰も小供が大人の言葉を口眞似するが如く、同一言葉を使用しても內容は少しも理解されてゐない場合がある。又全く違つた意味に解されてゐる場合さへあり得る。從つて如何に多くの外來思想書が紹介されてゐても、それだけで思想的影響が大であつたと斷定することは出來ない。後者の場合には假令同一思想が兩國間に存在してゐたとしても、一方が必ずしも他方の思想的影響に基づくものと斷定することは出來ない。同じやうな文化の段階にある場合、同じやうな思想を生ずることはあり得ることだからである。

さらに思想史研究上に注意すべき點は外來思想の攝取のあり方である。後進民族の思想が甚だしく異質的である時は、容易に外來思想を攝取し得ないことは前述の如くであるが、又民族性の如何にも依存する。島國民族は模倣性に富むといはれてゐるが、それは隣接大陸から恆に優秀文化を攝取してゐたといふ永い間の傳統に歸ずべきであらう。本來固有思想は容易になくなるものではない。元來それらがその國の風土を基本とし、永い間と生活のうちに育成されたものであるからである。故に表面的に外來文化に壓倒的に同化したとみられる場合でも、思想的には容易に同化し得ないものである。ここに思想の保守性といふことが考へられる。前述したBのA化といふことはかうした點から當然起らなければならない。この點は外來思想を批判的に攝取した場合でも、無批判に模倣した場合でも同樣である。ただ攝取のあり方が批判的であればあるほど新しいA′に進展する可能性が高く、無批判的であればあるほど、AはA′にならずしてAの保守性が強く殘存する。從つてある民族の思想的發展を檢討するに際し、外來思想を如何なる形態で攝取したかを十分注意する必要がある。例へばアダム・スミスの思想がドイツに及ぼした影響と、日本に及ぼした影響とでは、その攝取のあり方に依つて非常に大きな差違を生じたと考へられる。勿論この外來思想の攝取のあり方は單に文化の程度の差違と民族性とだけの問題ではなく、外來思想の移入の形式、時期等のいろいろな偶然的要素が附加され、實際には極めて複雜なものとなつてあらはれるであらう。

四

思想史研究においては最も困難な、又その基礎的作業であるのは個個の思想の檢討である。すでに述べたやうに思想史の研究は結局個の思想の檢討を通じて把握し得るものである。從つてこの部分の仕事が十分に行なはれてゐるかゐないかが思想史研究に大きな影響を與へることになる。勿論直觀的洞察力の鋭い者が個個の不備を無視して全體的把握を完成することはあり得るが、その場合でも個の檢討が不必要であるといふことは意味しない。より完全な個の檢討は全體的把握を修正することにならう。個の思想はその個の有する性格に依つて規定づけられる。前には私は個の思想はその個を成立せしめた幾多の條件に依つて規定されると述べて置いたが、それらの條件は極めて複雜多樣であつて、同一條件の下に置かれる者は一人もない。從つてそこに各人各樣の性格が生まれる。それが個性と呼ばるる

唯一無二のものである。そこに類似性はあるが同一性はない。諸條件の結合（コムビネーション）は無限である。ある思想家の思想も一般人の思想もそれぞれの性格に依ることは同じであるが、一般人にあつては個性の發達が思想家ほど著しくなく、從つて思想の特異性が現れて來ない。思想的には大體において大勢順應的である。それは多くの個の性格は廣義の環境に依つて形成され、これに順應する傾向をもつからである。

個の性格は時間的並びに空間的に制約されて形成される。複雜な諸條件の結合ではあるが、それらは大體においてこの二つのものに歸することが出來る。第一に時間的にはその個の生成をみるに至つた過去の時間に制約されざるを得ない。それは生物學的には遺傳といふ形において、又歴史學的には傳統といふ形において制約される。人間の精神的發達に遺傳がどれだけの效果をもつか私は知らない。しかし肉體的遺傳が性格の形成に大きな影響をもつことは明かであり、從つてそれが思想形成にかなり根本的な影響を與へると考へられる。ただ「生みより育ち」といふ俚言もあるやうに、先天的に與へられてゐる素質は後天的に育成さるることもあり、又阻止さるることもある。そこに所謂教育の難しさもあり、重要さもあるのであらう。何れにしてもわれわれの思想が最初に先天的に制約を受けるものは遺傳であらう。勿論ここに遺傳といふ中には單に肉體的面ばかりでなく、われわれの祖先が過去において享けた體驗の結果が集積されてゐるものと考へられよう。古代の原始生活における恐怖の觀念が今なほ現在の文化人にも遺傳してゐるし、それが多少共その思想に影響を與へてゐるといへよう。シチュリン、ルイセンコ等の新しい遺傳學說がどれだけ正しいか、又メンデルの學說はなほ支持さるべきか否か、それらについては全く無知である。ただここにいふ遺傳といふのは、われわれが血緣關係に依つて先天的に附與されたと考へ得られる一切の制約條件のことである。

この外に個が元來孤立的存在でなく、何らかの社會的集團のうちに生活するために、その思想はその屬する集團の有する一切の過去に依つて制約される。家・國・民族等の有する過去はそこに生活する個の行動を何らかの形で拘束する。この力をここでは傳統と名づける。われわれの物の考へ方は不知不識に傳統に依つて支配されてゐる。民族思想とか國民思想とか呼ばるるものを成立させるのも、同一の傳統を有する各個の思想に共通なものを有してゐるからである。それらは個がその生存の當初においてすでに素質としてもつてゐるものであるか、又はその後の集團内の生活に依つて獲得したものであるか、嚴密にいへばその區別はつけ難い。過去の生活から生み出された傳統の强さから思ふと、ある程度までその當初から素質として與へられてゐるやうに思はれるが、又よしその大部分が後天的にその社會生活に依つて形成されたとしても、個の思想形成に大なる制約となつて來ることには變りはない。ただその場合には次ぎの空間的制約と密接に關係づけられ、一層强力なものとなつて來るであらう。それは民族性といふやうなものをも形成する。

個の性格を作り上げる第二の空間的制約といふのは通常環境（ミリユ）と呼ばるるものである。環境の如何が性格の形成に大なる影響のあることは多くの人のいふところであり、敢てここに多く論ずる必要もない。ただここに環境といふのは單に國土・氣候等の自然的條件ばかりでなく、一般生活の營まれる社會的條件をも包含する。殊に個の生活の行なはれる一切の個個の過程に遭遇するすべての事件を含むものであるから、實際問題としてこれを明瞭にすることは極めて困難である。然るに思想といふ問題に關する限り、性格に與へる微細な事件の影響が大きく作用して來るのである。從つて概括的には殆ど同樣な環境に置かれた者でも、決して同じやうな思想を形成すると限らないのである。即ち同一事件が思想的に同一效果を生まないのは、異なつた個個性格に基づくばかりでなく、その性格の感受性がその場合場合に依つて異なるからである。從つてある種の環境がある種の性格を形成するといふことは概括的にいふこと

は出來るが、ある種の性格は必ずある種の思想を形成するとはいへない。即ち思想は單に個の性格に依つて規定づけられるに過ぎない。この點はなほ思想そのものの特質について若干考察する必要がある。

以上述べたやうに個の生活は時間的にも空間的にも限定され、その獨自の性格を形成する。そしてその思想はその性格に依つて規定づけられるから、そのあり方の如何に依つては極めて狹隘な思想を構成することもあり得る。しかし思想そのものの性質は本來において非時間的であり、非空間的である。思想はその意味においては何らの制限をも受けない。われわれが西洋思想の、又は古代思想の影響を多分に受容れることが出來るし、又個に依つてはむしろ一切の前述の諸制約から生じた一般的思想――例へば日本的思想とか、アジア的思想といふものから離れて、個の屬さない他の一般的思想――例へばギリシャ思想とか、西歐思想とかに同化することさへ出來る。又さうした一切の制約を考へずに思想そのものを取扱ふことも可能であらう。殊に人類の思想的交流の發達した今日においては各個の思想に及ぼす影響は空間的にも時間的にも拘束されない。然らばわれわれの思想的發展は全く自由なものであらうか。前述の諸條件に依つて作られた性格からの規定づけは極めて弱いものであらうか。

ここに再び感受性が問題となつて來る。われわれが時間も空間も超越して受容する思想は、といふよりも一切の外から受ける思想は言葉を以つて表現される。それから受ける個の思想への影響はその個の性格・素養の如何に依つて全く異なる。即ち時間的にも、空間的にも限定された諸條件の下に構成された性格に從はざるを得ないであらう。偉大なる思想が必ずしも偉大なる影響を與へると限らず、平凡なる事實が偉大なる思想の動機となることはわれわれが往往にしてみるところである。このことは思想史研究に際し、思想家の思想系統を檢討する上に一つの困難な問題を提供することになる。要するに問題は思想そのものにあるのではなくして、これを受ける個の性格にある。從つてその性格を決定する諸條件は個の思想を檢討する上に、重要な役割をもつことになる。

さらにこのことは他の方面からもいへる。ある思想家の著作を通じてその思想を知る際に――又事實これ以外に個の思想を知る方法はない――その思想家の性格を形成した諸條件を無視して考察すれば、正しい言葉の意味を把握することも出來ず、從つて正しい思想を知ることが出來ない。例へばある言葉はその思想家の獨自の性格から特に重要な意味をもつことがある。又ある種の議論はその思想家の屬する時代を背景としてのみ意義のある場合もある。從つて個の思想を正しく理解するためには、その個の性格を決定する諸條件を出來る限り明かにしなければならない。

この場合注意すべきことは、往往にして時間的顚倒の誤謬を冒すことである。ある事件とある思想とが密接に關係ありと推斷して、時間的に先行する思想をそれよりも後の事件の影響の如く論ずることである。殊にこの誤謬は思想の社會的背景を重視する論者に多い。漠然と當時の全般的な社會思想を論ずる場合とある一定の個の思想を論ずる場合とは甚だ異なる。個の場合は前にも述べたやうに重大なる事件が必ずしも重大なる影響を與へると限らない。些細なことがその個の性格如何に依つてはその思想に重要な影響を與へることがある。從つて個の思想を概括的社會狀勢を以つて規定づけることは危險である。元來個の性格を決定する諸條件は前述の如く時間的にも、空間的にも限定されてゐる。換言すれば個の體驗は現實の生活に局現されてゐるのである。中世の思想家を論ずるに現代人の立場を以つてすることは出來ない。

本節の劈頭に私は思想史研究の上に最も困難な作業といつたのは、これらの諸條件を現實に明確にすることは不可能に近いことだからである。ある個の思想が如何なるものであつたかをその著作を通じて究明する場合、少なくとも、その著作の年代――現存するテキストが果たして正しいものであるかどうかといふやうな原本批判（テキストクリチーク）はしばらく論外

として――その著作當時の著者の立場、著作の理由等を知らなければならない。もしその思想系統といふやうなことになれば、さらに一層細部の檢討を必要とする。さらに古い時代の思想家を取扱ふ場合には言語學的問題を生ずる。所謂古典書に多くの註釋書が發生する所以である。著者の表現を出來る限り著者の意圖する如く理解するといふことは決して容易な仕事ではない。

一般にわれわれが自分の知識欲のために、思想家の書物を讀む時には、それを自己流に讀解することは差支へない。又時には現代流の解釋を加へて何かに利用することも決して意味のないことではない。かの論語泰伯篇の「子曰、民可使由之、不可使知之」の一句が本來の意味とは少しく異なつて解釋されて一般に通用してゐることの如きも一つの時代的意味がある。しかし思想史研究者としてその原典を檢討する場合には出來るだけ嚴密に本來の意味を探求しなければならない。古典から現代的意味を汲みとることは思想史研究者の任務ではない。思想史研究者はどこまでも客觀的にその意味を知らなければならず、そのためにはその時代の用語、又その思想家の用語にも通曉しなければならないのである。（但し前掲の例の如く時代に依つて解釋を異にする文章の如きは、思想史において意味があるばかりでなく）現實と思想との關聯を示す一つの例として歴史的意味もある）かくして個の思想の研究においては前述したやうな細部の骨の折れる檢討が必要となるのである。勿論これを理想的に實現することは不可能なことであらうが、少なくともかうした心構えを以つてその全力を盡し、不注意から生ずる誤謬をなくし、客觀的に把握することが、思想史研究者の採るべき態度であるといへるであらう。

五

上述の如く個の思想を檢討することを客觀的に實施するに際しては、前にも一寸附言した原典批判を始め、一般史家と同樣の資料批判が問題となつて來る。例へば江戸時代の思想家の有名なものについては、今日相當多くの活字本が出てゐる。然るにそれらの多くは何らの原典批判をなされてゐない。加ふるに誤寫誤植が多い。その著作が有名なものであれば幾通りかの筆寫本がある。その何れが原著に近いものであるかは容易に判定し得ない。原著者の草稿があれば最もよいが、それのない場合が多い。殊に江戸時代の筆寫は必ずしも原本通りに寫さない。殊に筆寫した者が相當の學者であれば、單に魯魚の誤謬を正すばかりでなく、內容まで訂正する。江戸時代の校正の意味は筆寫する者が正しいと考へるものに直すことであるから、時に原著者の意圖するものと全く異なつたものになることさへある。從つて原典に近い筆寫本と思はれても、なほ異本があれば、これと照合する必要がある。その僞本の判定、板本のこと、著作年代等の多くの考證を必要とする。

一人の思想家の思想と雖も恆に一定してゐるわけではない。それが偉大な思想家であればあるほど變化する。著作年代の異なつたものを對比してその矛盾を指摘し攻擊しても意味がない。その思想の成長發展の跡を辿る時に始めて思想史的意味がある。從つてそれが何時頃書かれたものであるかが重要な意義をもつて來る。この點になると思想史研究者は一般史家と同樣の、否時にはそれ以上の廣汎な知識をもつことを要請される。その思想家の日記書簡等は勿論、斷簡的なメモさへも忽諸に付することが出來なくなる。それらの資料の蒐集整備、その資料の價値判斷等多くの骨の折れる作業が必要となるのである。さらにその思想家の思想の全體の思想史上における正しい位置づけ（オリエンテーション）を行なふためには一層困難な繁雜な仕事と鋭敏な洞察力とが要求される。これらの細部に亙る勞作が完成されることに依つて、思想史は始めて正しい素材の上に立脚することが出來るのである。

勿論かうした勞作はただ一人の研究者に依つて完成し得るものではない。多數の研究者の協力を俟たなければならない。元來思想の問題は人類にとつて最も重要なものであるといへよう。人類の發展は單なる生物的增殖にあるのではない。考へる動物として他の動物と區別さるるが如く、人類は單に自然の展開に從屬して生活する者ではない。自然を思惟し、想定し、批判し、自らの世界を創造するものである。古代における汎神論的神祕思想から近世における科學的合理思想に至るまで、かうした人類の意志的活動のあらはれに外ならない。勿論それらは未だ完全なものではないし、又全實在の部分的解釋に過ぎない。さらにそれらは前述の如く現實の生活に依存する限りにおいて、現實の發展を伴はずしては發展し得ない。しかし同時に現實生活の發展を促進し指導する役割をもつ。それらは不完全なるが故に、しばしば大なる錯誤を生じ、多大の犧牲を生ずることが少なくないが、それらに依つてのみ人類は自己の生活を打開し得るのである。結局するに思想の多樣性といふことも、人類が複雜な實在の內容を把握せんとする努力の當然の結果であつて、これを單一の思想に歸一させることは不可能である。

從つて思想史研究においては、一方各個の思想を檢討し、それが如何なる現實に對する批判として生じたか、又それが思想自體として如何に展開し、それが現實に對する反映を明かにすると共に、他方においてその社會の全體としての思想の動向を檢討し、その思想に依つてその社會の現實が如何に進展させられたかを明かにすることを任務とする。すでに最初に述べたやうに、それらの個のうちには社會の全體の思想に同調するものもあらうし、それに反抗するものもあらう。又全體の思想を誘導するものもあり、全然相容れないものもあらう。それにも拘らずそれらがすべてその時代のその社會における全體思想を形成するものとして、何らかの意義があり、當時の現實――それは又全實在の一つの啓示としての意味がある。

（昭和二十七年四月二日稿）

「生產的勞働」について

遊部久藏

一　「生產的勞働」――古典的確認
二　アダム・スミス――第一及び第二の規定
三　アダム・スミス――第三の規定は存しないか？

一

人間は生きてゆくためには勞働をしなければならない。勞働による人間にとつて必要なものの生產こそ、「一切の歷史の根本條件」である。このような意味での勞働は、人間と自然との間の一過程、換言すれば人間と自然との間の質料變換の一般的條件である。したがつてそれはいかなる社會形態からも獨立の、むしろいかなる社會形態にも共通の本性を有している。我々はかくの如き勞働過程の主要契機として、人間による勞働と生產手段（勞働對象及び勞働手段）とをあげることができる。もちろんこの場合の勞働を單純に動物的活動と同一視することはゆるされない。それはあくまで人間に固有の勞働であり、したがつて合目的的な、かくして社會的協働をそれ自身のうちにふくみ、ひいては技術の特有の形態をおびたものである。が、しかし、勞働はかくの如き勞働過程において機能するものとしては、使用價値の生みの親としての勞働であり、W・ペティの「勞働は富の父であり、土地はその母である。」にいわゆる勞働である。そのかぎりにおいて使用價値そのものの無規定性に關聯對應する勞働過程そのものの無規定性がみ